〔書　評〕

神奈川大学人文学研究所（編）

『ロマン主義のヨーロッパ』

ヨーロッパ・ロマン主義の諸相

鈴　木　紘　治（成蹊大学教授）

本書の書評を依頼されたのは11月であったが，実際には年も押し詰まった頃，やや負担に思いつつ読み始めた。だが，内容の面白さに次第に引き込まれていき，最後には良書を読む機会を授かったことを心から感謝したい気持になった。今回は，学問的な批評というスタイルを採らずに，評者の素朴な読後感をそのまま記して，読書の経過をなぞってみたい。

評者のバックグラウンドが英文学，殊に詩であることから，読み進む順序も本書の収録順とは異なり，自らが興味を持つテーマから恣意的に読んでいった。最初に読んだのは，岩崎豊太郎氏の「イギリス・ロマン派の詩と絵画における想像力―ブレイク，ワーズワス，ターナーとコンスタブル―」で，本書全体を見渡すための適切なパースペクティヴが得られた。評者自身，日曜画家としての興味から常々注目しているブレイクとターナーについては，その簡明な記述に同感の思いを深くした。またコンスタブルについては，単に静けさをたたえた牧歌的な風景を描く画家としてではなく，「自然の豊穣さ」を強調する，「生産的な女神」としての自然を描いた農村出身の画家であるという，新しい見方を教示された。

次に読んだ奥田宏子氏の「イギリスのロマン主義とダンテ―コウルリッジのダンテ観―」は，圧巻であった。筆者の学問的情熱が伝わってくる力強い書き振りに，脱帽した。学生時代，ワーズワースの『序曲』を論文のテーマに選んだ評者にとって，コウルリッジについて読むことは，一種のセンチメンタル・ジャーニーだったし，イギリス留学中に感じたダンテの重要性を再認識させられもした。T・S・エリオットのルーツのようなコウルリッジの批評家としての問題意識や判断基準について，深く教えられる所があった。学問的な論文も，かなり面白い読み物となり得るという，すぐれた論文を読む時にしばしば感ずる思いを，今回も味わった。

松山正男氏の「ルソー，ロマン派，フェミニズム覚書」は，目下注目されているフェミニズムというテーマを巡り，イギリスのロマン派時代のフェミニズム的運動を概観し，ウルストンクラフトの主張を検討し，更にルソーの女性観についてプラス・マイナス両面から論じている。フェミニズムを論じる際，論を為す者が男性である場合は，どうしても「男性の論理」が入り込み易い。外山滋比古氏に『女性の論理』という著書があるが，男性であるが故に浮き彫りになる女性の特質というものがあり，その点ではプラスである。しかし，女性の論者は女性自身の内側からフェミニズム論を書けるのに対して，男性の論者は自己の内に参照すべき枠組み（フレーム・オブ・レファレンス）を持たない。この点はマイナスである。

鳥越輝昭氏の「ヴェネツィア，未来派，過去主義者―マリネッティ，ラスキン，レニエと近代化―」は，ヴェネツィアという町の近代化を巡る二つの対立する立場として，マリネッティ等の〈未来主義者〉とラスキンやレニエの〈過去主義者〉とを対比的に論じたものだ。近代産業主義の重要な一面である機械主義をプラスの価値として認めていこうとする〈未来派〉の理念と，中世の石工

たちの環境を理想的なものと考えるラスキンや，ヴェネツィアに対する愛に基づく「陋巷趣味」や「貧しい庶民の暮らしぶり」を美的対象とするレニエの反近代的な世界観とを，やや図式的に対置している。ラスキンの反近代主義が，彼のヒューマニズムあるいは人間観に基づくものである点と，人間は機械とは異なる「思考し創造する存在」であるとするラスキンの認識の本質を，本論はよく捉えている。

近藤正栄氏の「ロマンティシズムとピューリタニズムの相関性」も，なかなか力の入った論文で，最後の〈解放の神学〉を扱ったあたりは，実に鮮明な印象を受けた。文明の論理として，氏は文明を構築する正統としてのピューリタニズムと，それに異議を唱え改革しようとするロマンティシズムという二つの流れを呈示する。評者には，文明の論理としての〈ピューリタニズム〉という大きな概念と，プロテスタンティズムにおける急進思想としての〈ピューリタニズム〉という小さな概念（我々は通常，この意味でピューリタニズムを理解している）とは全く異なるものであることが，最初は理解しにくかった。しかし，文明の論理としてのロマンティシズム（我々の通常知っている文芸運動としてのロマンティシズムとは異なる概念）が，ヒューマニズムをその本質的契機として持っているという指摘は，面白かった。

伊坂青司氏は「闇と悪の系譜―ドイツ・ロマン主義への一視角―」の中で，ドイツ・ロマン主義の役割が「自然の闇」と「人間の内面に隠された悪」という二つの相関連するテーマに目を向けたことにある，という認識を示している。それは，従来のマイナス原理にプラスの価値を与えようとする逆転の発想でもあった。氏は更に，シュレーゲルやシェリング等に見られるロマン主義的哲学思想が，その根をベーメの神智学に持っており，自然哲学者バーダーを介して哲学者たちに伝わっていったという経緯を明らかにする。シェリング等は，グリム兄弟と同じ精神状況の中で，悪の問題を主題化していったのである。時代が，悪の存在に人々の目を向けさせたのだ。

評者が最後に取り組んだのは，佐藤夏生氏の「スタール夫人におけるロマン主義理論の形成」で，シャトーブリアンと並んでフランス・ロマン主義の誕生に貢献したと評価されているスタール夫人のロマン主義理論の形成過程を論じたものである。佐藤氏はスタール夫人の『文学論』『ドイツ論』に即して，ロマン主義理論の形成過程に焦点を当てているが，我々読者はむしろ，その結果の方に関心がある。スタール夫人がロマン主義をどのようなものとして捉えていたか，という点である。佐藤氏の論は，スタール夫人を巡る時代背景やサロン等の状況をも的確に描き出している。手堅い学問的追究といった感じで，読み終わって評者は静かな感動を味わったことを記しておきたい。